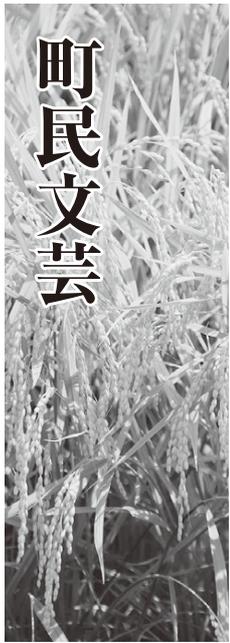


町民文芸



只見短歌会

八月詠草

大塚栄一

指導

馬場 八智
想い居し老人ホームに友訪えば吾も行く道としみじみ思えぬ

目黒 富子

水溜りの映す青空に幼子は飛行機浮かせ小踊りをしぬ

渡部ゆき子

食べ頃と成りし唐黍白鼻芯に一夜に折られ食はれ荒らさる

関谷登美子

エンジンをかけると蛇の入り来ると車のドア閉め娘孫行く

渡部ヨリ子

猛暑日に消雪の水出しをれば裸足で孫らは喜び遊ぶ

新国由紀子

入院の母を見舞へば様々な人ありと身の幸せを言ふ

新国 洋子

施設に行くわれにと姪が買ひくれし猫の置物朝夕親し

(出詠順)

只見俳句会

九月定例会

目黒十一

指導

吉 児
戦友の鬼籍に入りぬ秋時雨
本箱に妻の小照虫しぐれ

幸 生

義母植えし梅の樹伐って愁思あり
八重むぐら斯くもしぶとく古畑

味代子

稲妻へ吹きながら覗く窓
帰り道急ぐ日暮の花芒

弘 子

山裾に日傘並べて穂の花
名目や供えの十五箕にかぞえ

一 恵

裏山のおしよせるとと蝉時雨
六つの瞳少女に戻るお盆かな

恒 夫
秋風や軍手の片手また無くし
祖父の名の絵馬を仰ぎて秋祭

礼

隣り合う墓参久しき声や声
へりコプター音高々と虹潜る

一 穂

秋の山バックナンバー覚えあり
曾孫の唐黍かじる齒は二本

修 一

こぼれ萩庭の一隅染め抜いて
秋の水鯉の尾びれのひと曲り

